

琉球大学学術リポジトリ

大学生・専門学校生の「意志型・願望型」とキャリアCAMIとの関連

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-10-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 廣瀬, 等, 島袋, 恒男, Hirose, Hitoshi, Shimabukuro, Tsuneo メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/2133

大学生・専門学校生の「意志型・願望型」とキャリアCAMIとの関連

廣 瀬 等*・島 袋 恒 男*

A study on Career CAMI of goal-oriented and non-goal-oriented type of university and vocational school students

Hitoshi HIROSE, Tsuneo SHIMABUKURO

要 約

職業に関する目標に対してどのような取り組み方をしているかにより、職業に対する統制感などがどのように異なっているかを明らかにするため、大学生・専門学校生を調査対象者として、「意志型・願望型」とキャリアCAMI尺度（島袋・井上、1996）との関連を検討した。意志型・願望型の分類にあたっては、望月（1991）の職業的発達尺度のうち、「職業的自己実現の志向」と「社会的職業的役割の検討」の因子を用い、両因子項目総得点とも高い学生を意志型、「職業的自己実現の志向」の得点は高く「社会的職業的役割の検討」の得点は低い学生を願望型とした。分析の結果、意志型の学生は願望型の学生に比べて、「学生の就職は、未知の原因や運では決まらず、就職に向けて自分は努力ができるし運も良いと考え、その結果として就職に無力感を感じない」ことが示された。しかし、両型で有意差が認められなかった部分の考察から、就職への手段の認識が必ずしも現実的であるとは言えず、また、それを受ける形での努力の保有感がないことから、希望通り就職できるという統制感が育っていない可能性も考えられた。

背景と目的

島袋（1998）は、高校生の将来の職業選択と進路意識の特徴と問題点の検討のなかで「意志型」と「願望型」の概念を提唱した。意志型とは将来に対する目標を持ち、実際に行動も伴っている高校生であり、願望型とは目標は持つが、実際の行動は伴わない高校生のことを指している。研究では高校生を進路希望水準と家庭学習時間にに基づいて、願望型と意志型に分類し、将来の職業選択、職業選択基準（労働価値観）を比較した。その結果、願望型と意志型の間には将来の職業選択と職業選択基準の両方において差異があり、その差異は「意味ある他者」の内面化の程度や進路意識の発達を反映したものであると考察された。

さらに、島袋（1999）では、小・中・高校生を

対象として調査を行い、進路希望水準が同じ（大学以上）であるが、実際に家庭学習を行っている児童・生徒と行っていない児童・生徒を、それぞれ意志型と願望型に分類し、学習CAMI尺度との関連で検討を行った。その結果、意志型の児童・生徒は願望型に比べ、学習達成における努力や教師の役割を理解し、その上で自らの努力と教師の保有感を持ち、結果として学習達成への統制感を高めていることが示唆された。

一方、島袋・井上（1996）は、大学生の職業選択・決定を目標行動と見なし、職業選択・決定に至る過程をCAMI理論（Skinner, Chapman & Baltes, 1988）を導入して、新たにキャリアCAMI尺度を作成することにより検討した。CAMI理論では3つの独立した統制感に関する信念（目標達成への統制感、達成のための手段保有感、達成のための他者

*琉球大学教育学部 学校心理学専修

の手段の認識)が区別されている。それまでの帰属理論では混合されていた、達成のための手段保有感と達成のための他者の手段の認識が分離されていることにより、より詳細な検討が可能であるという特徴をもつ。因子分析の結果、キャリアCAMI尺度の3つの下位尺度は、目標達成への統制感尺度が3因子、達成のための手段保有感尺度が7因子、達成のための他者の手段の認識尺度が7因子でそれぞれ構成されることが明らかになった。

また、岸本(2002)は、島袋・井上(1996)の結果を受け、不況下で大学生の就職率が非常に低下した社会状況の中で、再びキャリアCAMI尺度を大学生に実施して検討を行った。因子分析の結果、目標達成への統制感尺度で2因子、達成のための手段保有感尺度で5因子、達成のための他者の手段の認識尺度で5因子をそれぞれ抽出した。具体的には、目標達成への統制感尺度では、「就職への無力感」と「就職への統制感」、達成のための手段保有感尺度では、「努力の非保有感」、「運の非保有感」、「能力・適性の保有感」、「友人の支援の非保有感」、「大学の支援の非保有感」、そして、達成のための他者の手段の認識尺度では「未知の原因」、「運の認識」、「能力の認識」、「努力の認識」、「支援の欠如の認識」のそれぞれの因子が抽出された。

さらに、島袋・廣瀬(2004)では、キャリアCAMI尺度を用いて、大学生・専門学生の「就職への統制感」と「就職への無力感」がどのような就職・職業に向けての自己理解に由来するかというパターンの解明を中心として分析を行った。その結果、「就職への統制感」は主に目標形成に関わっており、職業の性質や活動の特徴の理解には関わりの弱いこと、および、「就職への無力感」は「目標・達成志向」や「勤労効果の検討」の未熟さに関係していることなどが示唆された。

以上の研究を踏まえて、本研究では、職業に関する目標に対してどのような取り組み方をしているかにより、職業に対する統制感などがどのように異なっているかを明らかにするため、大学生・専門学校生を調査対象者として、「意志型・願望型」とキャリアCAMI尺度(島袋・井上, 1996)との関連を検討することにする。なお、本研究での意志型・願望型の分類にあたっては、島袋(1998)

や島袋(1999)で使用された進路希望水準と家庭学習時間による分類ではなく、新たに、望月(1991)の職業的発達尺度のうち、「職業的自己実現の志向」と「社会的職業的役割の検討」の因子をそれぞれ「将来の目標」と「実際の行動」に関連あるものとして位置づけ、類型化することにする。これは、「職業的自己実現の志向」は本研究で取り上げる「将来の目標」と密接に関連し、「社会的職業的役割の検討」は「実際の行動」と密接に関連すると考えたためである。そして、両因子項目総得点とも高い学生を意志型、「将来の目標」の得点は高いが「実際の行動」の得点は低い学生を願望型として定義し、検討を行う。キャリアCAMI尺度については、同様な時代背景である岸本(2002)の因子構造に基づき検討することにする。

方法

調査対象者 沖縄県内の大学生、専門学校生234名(男性130名、女性104名)が調査対象者であった。

調査尺度 デモグラフィック要因、および「キャリアCAMI尺度」(島袋・井上, 1996)を60項目、「職業的発達尺度」(望月, 1991)から抜粋した33項目をそれぞれ5件法で回答させた。

調査期日 青年心理学、カウンセリング、心理学の講義の中で、2002年6月に実施した。

結果と考察

1) 職業的発達尺度による類型化

職業的発達尺度による類型化を行うため、職業的発達尺度の下位因子である将来の目標(職業的自己実現の志向)因子と実際の行動(社会的職業的役割の検討)因子のそれぞれについて、総得点の平均値を算出した。その結果から、将来の目標因子では30点、実際の行動因子では40点を基準に高低に分けることとし、それぞれの組み合わせから図1に示すように、意志型、願望型を含む4つの型を設定した。

まず「意志型」は、将来の目標因子と実際の行動因子の両因子の総得点とも平均値より高い型であり、114名が含まれた。次に、「現実行動型」は将来の目標因子の総得点は平均値より低く、実際の

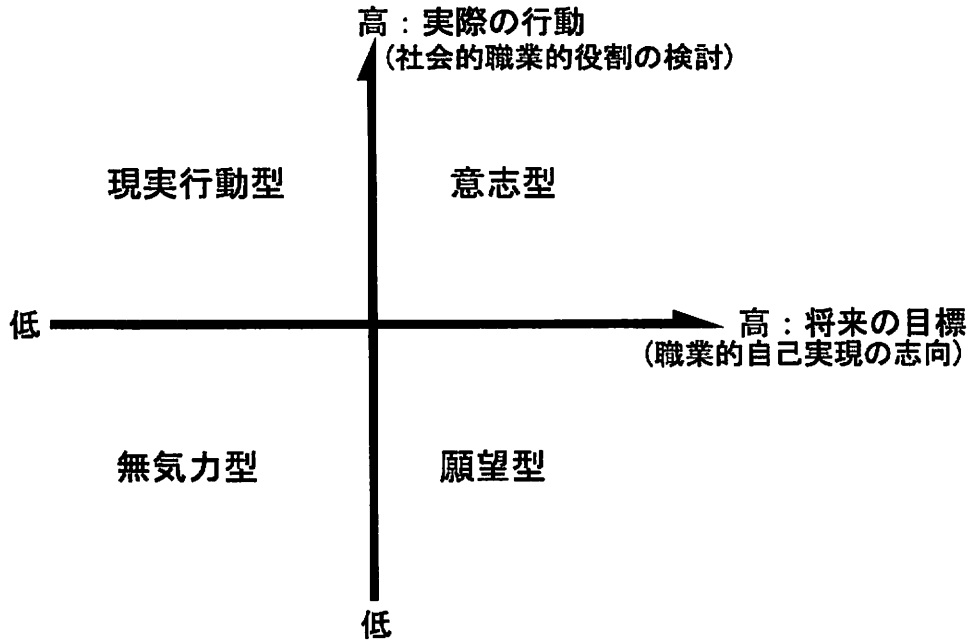


図1 実際の行動因子と将来の目標因子による類型化

表1 キャリアCAMIの各下位尺度における各型の比較

	全体		分散分析 F値	平均値と多重比較の結果				
	平均値	SD		意志型	願望型	無気力型	無気力型	
統制感	就職への無力感	6.12	2.05	7.73***	5.67 A	5.71 AB	6.97 BC	7.00 C
	就職への統制感	10.51	1.89	6.78***	10.96 A	10.59 AB	10.30 AB	9.60 B
手段保有感	努力の非保有感	-7.61	3.16	-15.68***	-8.57 A	-8.44 A	-6.41 B	-5.55 B
	運の非保有感	9.33	2.83	8.72***	8.79 A	8.42 A	10.59 B	10.58 B
	能力・適性の保有感	5.56	3.46	10.37***	6.54 A	3.78 C	6.54 AB	4.35 BC
	友人の支援の非保有感	-0.51	1.73	5.03***	-0.78 A	-0.13 AB	-1.11 A	0.09 CB
	大学の支援の非保有感	-5.62	2.10	4.04***	-5.89 A	-6.02 A	-5.48 AB	-4.79 B
	未知の原因	12.11	3.35	11.32***	11.18 A	11.58 AB	14.73 C	13.11 BC
他者の手段の認識	運の認識	10.05	3.37	7.07***	9.87 A	8.59 A	12.19 BC	10.47 AB
	能力の認識	31.33	4.76	1.45	31.71	32.00	30.63	30.35
	努力の認識	23.65	3.33	3.62*	23.82 AB	24.81 A	23.04 AB	22.67 B
	支援の欠如の認識	17.59	3.56	0.69	17.46	17.32	18.48	17.64

* $p < .05$, *** $p < .001$ ※多重比較の欄の異なる英文字間は、5%水準で有意な差があることを示す。

行動因子の総得点は平均値より高い型であり、41名が含まれた。「願望型」は将来の目標因子の総得点は平均値より高く、実際の行動因子の総得点は平均値より低い型であり、27名が含まれた。また、「無気力型」は、将来の目標因子と実際の行動因子の両因子の総得点とも平均値より低い型であり、52名が含まれた。

2) 職業的発達の種類とキャリア CAMI との関連

職業的発達の4類型によるキャリア CAMI の違いを検討するため、キャリア CAMI の下位尺度ごとの分散分析を行った。分析の結果を表1に示す。

分析の結果、まず、「目標達成への統制感」に関する全2因子（就職への無力感、就職への統制感）において類型の主効果が有意であった。また、「達成のための手段保有感」に関する全5因子（努力の非保有感、運の非保有感、能力・適性の保有感、友人の支援の非保有感、大学の支援の非保有感）においても、類型の主効果が有意であった。「達成のための他者の手段の認識」については、3因子（未知の原因、運の認識、努力の認識）において類型の主効果が有意であり、2因子（能力の認識、支援の欠如の認識）については有意ではなかった。

主効果が有意であった各因子に対する下位検定の結果について、まず、意志型と願望型に着目すると、「目標達成への統制感」における就職への無力感、「達成のための手段保有感」における努力の非保有感と運の非保有感、「達成のための他者の手段の認識」における未知の原因、運の認識において、意志型に比べて願望型の方が有意に得点が高かったといえる。これらの結果から、願望型の学生は意志型の学生に比べて、「学生の就職は、未知の原因や運で決まり、就職に向けて自分は努力もできないし運も悪い」と考え、その結果として就職に無力感を感じる」ことが示されたといえる。意志型という観点から述べるならば、意志型の学生は願望型の学生に比べて、「学生の就職は、未知の原因や運では決まらず、就職に向けて自分は努力ができるし運も良い」と考え、その結果として就職に無力感を感じない」ことが示されたといえる。

なお、現実行動型については意志型と同様な傾向を示しており、「達成のための手段保有感」における能力・適性の保有感においてのみ、意志型よ

りも有意に低い得点となった。これは、意志型と「実際の行動」では同様に活発であっても「将来の目標」がはっきりしない現実行動型では、意志型に比べて就職に関して自分の能力や適性が低いと感じていることが明らかになったといえる。また、無気力型については、願望型と同様な傾向を示し、「達成のための手段保有感」における友人の支援の非保有感においてのみ、願望型よりも有意に高い得点となった。これは願望型と「実際の行動」では同様に活発でなく、さらに「将来の目標」もはっきりしない無気力型では、願望型と比べて就職に関して友人の支援がないと感じていることが明らかになったといえる。

これまでの結果、「意志型と現実行動型」、「願望型と無気力型」では、それぞれほぼ同様な結果が示されたことから、将来の目標因子に比べて実際の行動因子の高低の効果がより明確に示されたともいえる。すなわち、将来の目標をもつことも大切だが、それ以上に就職に関して実際にどれくらい行動しているかが、「達成のための他者の手段の認識」や「達成のための手段保有感」、さらには「目標達成への統制感」をより良い方向へ高めることを示唆した結果であるともいえる。

本研究では、職業的発達尺度による類型化を行い、4つの型を設定した。4つの型の中では、将来の目標はより高く、実際の行動もより活発な意志型が、「学生の就職は、未知の原因や運では決まらず、就職に向けて自分は努力ができるし運も良い」と考え、その結果として就職に無力感を感じない」という最良の結果を示したといえる。ただし、「達成のための他者の手段の認識」における能力の認識尺度、努力の認識尺度や支援の欠如の認識尺度、「目標達成への統制感」における就職への統制感尺度においては、意志型、願望型の間に有意な差は認められなかったことから、意志型の学生でも、就職への手段の認識が必ずしも現実的であるとは言えず、また、それを受ける形での努力の保有感がないことから、希望通り就職できるという統制感が育っていないとも考えられる。希望通り就職できるという「就職への統制感」を高めるためには、もっと就職の現実に関する情報を広く・深く伝え、就職に向けての行動や努力の過程を育てていくことが必要であるといえるだろう。

付 記

本研究の一部は、日本教育心理学会第45回総会(2003)において発表された。

引用文献

- 岸本琴恵 2002 大学生・専門学校生の職業意識の発達について 日本進路指導学会主催 第20回進路指導研究セミナー大会
- 望月葉子 1991 職業的発達過程の類型化の試み—仕事への志向性と心理・社会的発達との関連から— 教育心理学研究, 39 (1), 57-66.
- 島袋恒男 1998 調査に見る沖縄県高校生の将来の職業選択と進路意識の特徴と問題点 沖縄県教育庁 平成10年度 進路指導, 21-35.
- 島袋恒男 1999 学習における「意志型」と「願望型」の学習統制感と原因帰属に関する研究 琉球大学教育学部紀要, 54, 515-521.
- 島袋恒男・廣瀬等 2004 キャリアCAMIによる大学生・専門学校生の職業意識の類型化—類型化とその特徴— 琉球大学教育学部紀要, 65, 151-160.
- 島袋恒男・井上厚 1996 キャリアCAMIによる大学生の職業意識の分析—キャリアCAMI尺度の作成— 琉球大学教育学部紀要, 49, 171-187.
- Skinner, E. A., Chapman, M., & Baltes, P. B. 1988 Control, means-ends, and agency beliefs: A new conceptualization and its measurement during childhood. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 117-133.